

2020年6月5日

ストレス耐性強い邦銀大手——経済悪化の影響を注視

新型コロナウイルスの感染拡大が急速に広がり、世界的に経済活動が急激に落ち込んでいる。ショックの大きさは少なくとも短期的にはR&Iの通常のリスクシナリオを大きく超えている。金融危機とは異なりまだ金融システムの余力は大きい。最大の焦点は収束までの時間軸とその後の経済の回復ペースだ。

IMF（国際通貨基金）によると、2020年の経済成長率（実質GDP成長率）は世界がマイナス3.0%、日本はマイナス5.2%まで大きく落ち込むと予測している。経済活動が元の水準に戻るのには先進国では2021年末頃、世界全体では2020年末頃になる。前提条件は、2020年後半に感染拡大が収束し、社会的距離政策に係る規制を徐々に解除することが可能になることで、2021年には政策支援もあって経済活動が正常化するというものだ。

日本の大手銀行は三菱UFJフィナンシャル・グループ（証券コード：8306、中核会社の発行体格付＝AA-）、三井住友フィナンシャルグループ（8316、AA-）、みずほフィナンシャルグループ（8411、AA-）の3メガバンク・グループを中心に、資本が充実しリスクプロファイルも比較的良好なため、ストレス耐性が強く格付は安定している。コロナショックの影響で、資産の質やリスク耐久力の悪化、保有有価証券の価格下落、収益の低迷などがある程度は見込まれるが、収束までの時間軸とその後の経済の回復ペースがIMFの予測程度であれば、現在の格付で許容できる範囲内の動きにとどまろう。

営業収益への影響は他業界と比べると小さい。収益はストック収益が過半を占めており、売り上げの急減で赤字に転落するようなフロー収益中心の収益構造にはないためだ。営業活動の制限が響いてコンサルティング型の手数料収益は減少が見込まれるが、企業の資金需要拡大は資金利益の増加要因になる。

資産の質やリスク耐久力へのマイナスの影響は時間軸によって異なる。収束までの時間軸とその後の経済の回復ペースがIMFの予測程度であれば、悪化の程度は限定的だろう。ストレス耐性を備えた与信ポートフォリオを構築しているほか、各国政府による借り手への特別支援や金融機関への各種の緩和措置などもあり、しばらくの間、デフォルトの増加は経済の落ち込み方と比べて相当に抑えられるだろう。

長期的な観点でみると、コロナショック後の新たな生活様式は、大手銀行が構造改革を加速し、生産性を向上させる契機となろう。それは国内銀行業務の低採算という最大の課題の克服につながり、信用力の底上げに寄与する可能性がある。

もっとも、先行きの不確実性は高く、IMFも予測を下方修正する公算が大きいとしている。収束までにかかなりの時間を要し、その後の経済の回復ペースも緩慢だと、影響は大きくなる。特に大口与信先の信用力の著しい低下が複数重なったり、不動産価格の下落が顕著になったりしてくると、金融システム問題に発展しかねない。外貨の流動性にも影響が出よう。世界的にはコロナショック前から債務（クレジット）の積み上がりが懸念されていたこともあるだけに、リスク伝播の状況を注視していく。

主任格付アナリスト：久保 太郎

■お問合せ先：マーケティング本部 カスタマーサービス部 TEL. 03-6273-7471 E-mail. infodept@r-i.co.jp

■報道関係のお問合せ先：経営企画室（広報担当） TEL. 03-6273-7273

株式会社格付投資情報センター 〒101-0054東京都千代田区神田錦町三丁目22番地テラススクエア <https://www.r-i.co.jp>

信用格付は、発行体が発行する金融債務についての総合的な債務履行能力や個々の債務等が約定通りに履行される確実性（信用力）に対するR&Iの意見であり、事実の表明ではありません。また、R&Iは、信用リスク以外のリスクにつき意見を表明するものではなく、投資判断や財務に関する助言や、投資の是非等の推奨をするものではありません。R&Iは、信用格付に際し関連情報の正確性等につき独自の検証を行っておらず、これに関し何ら表明も保証もいたしません。R&Iは、信用格付（変更・取り下げ等を含む）に関連して発生する損害等につき、何ら責任を負いません。信用格付は、原則として発行体から対価を受領して実施したものです。なお、詳細につき<https://www.r-i.co.jp/docs/policy/site.html> をご覧ください。